

石巻南浜津波復興祈念公園において想起される イメージの多元性とその縁の特徴

1X18D076-7 結城拓海*

本研究では、石巻南浜津波復興祈念公園を対象として、アンケート調査及び写真投影法を基にしたインタビュー調査の内容を分析し、祈念公園において人々が想起するイメージの実態を、その生成過程や要因の観点から明らかにした。その結果、石巻南浜津波復興祈念公園においては、「追悼のための場」、「学習のための場」、「日常利用のための場」等のイメージがあり、それらは外部から観察可能な基本属性に依存するものではないことが明らかとなった。また、想起されるイメージを、指摘されたエレメント間の構造的な特徴から分析した結果、イメージの縁の型の相違に基づいた風景の見方のパターンを同定することができた。

Key Words : 震災復興祈念公園, イメージ, 想起, 復興デザイン

1. 序論

1.1. 背景と目的

東日本大震災から10年余りが経過し、これまでの間に東北の各被災地域では、生活基盤の再建と社会資本の整備が進められ、その検証が既に至る所で始まっている。情報化を迎えた社会において、東日本大震災は世界中で中継された津波の衝撃と、タイムライン上に溢れた個人のつぶやきのリアリティとを伴って、場所を超えて多くの人々に経験された他、震災後にはクラウド上で故郷の写真を集めアーカイブする動き等も盛んであった。東日本大震災以降、消失した一人ひとりの「風景」にどのように向き合い、再生するのかが大きな関心ごとの一つであったと考える。

震災からの復興を特徴づけるものの一つに震災復興祈念公園がある。震災復興構想会議にてその端緒を見、岩手・宮城・福島には、各一か所ずつ国営追悼・祈念施設が整備されることとなった。こうした災害記憶の縁(よすが)としてのデザインがそこそこで工夫されている一方で、吉原¹⁾は震災アーカイブにおいて、個人よりは集団の観点が重要視されていると指摘している。それは、公共空間における極めて私的な祈り、という震災復興祈念公園が生得的に抱える問いにも通ずるものであろう。

東日本大震災とその後の過程を経験した、或いはしなかった主体が如何に風景を眺め、何を想起するのか。風景の多元性とその意味を拾遺することは、今後の復興デザインにおける課題であると考えられる。

以上の背景に基づき、本研究は、石巻南浜津波復興祈念公園を対象として、祈念公園において想起されるイメージの実態を、その生成過程や要因の観点から明らかにすることを目的とする。

1.2. 既存研究の整理と本研究の位置づけ

景観・計画分野では、住民の日常的な記憶や地域に付帯されるイメージに着目し、まちづくりに生かしていこうとする視点が、早い時期から内包されており、東日本大震災で被災した地域においても、住民の記憶を手掛かりとして場の再構築を試みる研究がなされてきた。矢ヶ崎ら²⁾は気仙沼市を対象として地域住民のオーラルヒストリーをコレスポネンズ分析とGISにより評価し、震災前の地域イメージを復元している。また、町を再現した白模型を用いたWSを通して、質的な特徴を含んでまちの記憶を再編した槻橋ら³⁾の実践的研究等がある。

これらに対し本研究は、祈念公園に来園する主体に着目し、想起されるイメージを分析及び考察の主対象とする点に特徴がある。

1.3. 研究の方法

アンケート調査の統計分析及び主体へのインタビュー調査を中心としたケーススタディに基づいて、仮説構築的にこれを進める。

2章では、各種計画及びデザインワーキンググループの資料を参考として、石巻南浜津波復興祈念公園のデザインと目指された姿を整理し、3章では、一般の来園者を対象としたアンケート調査を多変量

* 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

解析し、回答の傾向や要因を明らかにする。4 章では、写真投影法を用いたインタビュー調査から、撮影対象や被験者が想起した心像の分析を行い、一連の風景体験において想起される心像と、エレメント間の関係からその構造を明らかにする。5 章では、以上に基づき、石巻南浜津波復興祈念公園におけるイメージの実態を概括した上で、そこから導かれるいくつかの考察を提示する。

2. 石巻南浜津波復興祈念公園のデザイン

2.1. 石巻南浜津波復興祈念公園のコンセプト

石巻南浜津波復興祈念公園は、東北三県に各一箇所ずつ整備された国営追悼・祈念施設を含む震災復興祈念公園の一つである。対象地はかつて湿地と松原に囲われた「浜」としての自然環境を有していた。やがて、高度経済成長期に差し掛かると、石巻工業港の開港や土地区画整理事業の中で急激な市街化が進行していった。こうしたかつての「浜」としての自然とのつながりや、市街地としての「街」の記憶といった地区の場所性に、震災によって失われた命への追悼と、伝承の役割を担う「祈念公園」という3つのレイヤーを重ねることが公園のコンセプトになっている⁴⁾。

2.2. 園内の主要エレメントとそのデザイン

園内の中央には献花台と人工水盤からなる「祈りの場」が整備され、人工水面と南側の自然水面が重なり合うことで、対岸の浜の自然と街の記憶との対比を図り、その関係性を視覚化しようと試みられた。また、「街」の記憶を継承するために、かつての街路が主要園路として残され、町の名前は広場名称や、園内の看板により明示された。「浜」の記憶を表象するものとしては、過去に湿地が存在したエリアに、「善海田池」として、貯水池が整備されている。周囲には湿性林や湿性草地が選定され、既に多くの生物が棲みつき始め豊かな水辺環境が再生されつつある。その他、敷地南東部に築かれた「一丁目の丘」から眺める公園全景や、2000年以降暗渠になっていた既存水路を開渠とした「聖人堀」、円形の大屋根と全方位に開かれた透明ガラスが印象的な「みやぎ東日本大震災津波伝承館」等が特徴的である。

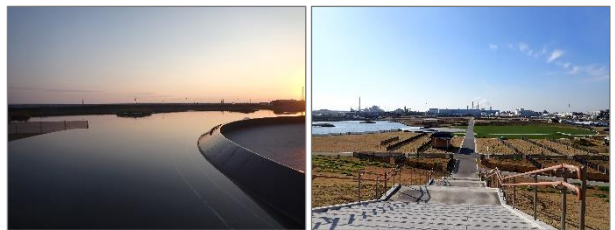


図-1 祈りの場と善海田池 図-2 一丁目の丘からの全景

3. アンケート調査からみる祈念公園の利用実態とイメージ

3.1. アンケート調査の概要

石巻南浜津波復興祈念公園の一般来園者を対象として、来園の目的や園内での行動、祈念公園に対するイメージ等を広く把握するために、アンケート調査を実施した。表-1、表-2に配布要領と回収率、質問項目をそれぞれ示す。

3.2. アンケート集計結果

(1)回答者属性

表-3に回答者属性の概要を示す。男女比に大きな差は見られず、年齢は50代が最も多かった。以降、複数回答の項目は、当てはまるもの全て選択の場合を*、個数に制限を設けたものを#で項目名右に表す。

(2)利用状況

図-3にアンケートに掲載した施設図、表-4に回答者の利用状況に関する回答を示す。来園目的は、「展

表-1 配布要領と回収率

対象者	石巻南浜津波復興祈念公園の来園者
配布数	1,600部
配布期間	2021年9月30日～12月31日
配布方法	直接配布及び施設内ブースに設置
回収方法	施設内での回収、郵送、Google formへの回答
回収数	302部(回収率：18.9%)

表-2 アンケートの質問項目

来園の状況や目的に関するもの	
来園日時・滞在時間・同伴者・公園までの交通機関・情報源	
目的物の有無とその内容・来園目的	
園内での実際の行動に関するもの	
利用入口・訪問場所・印象に残ったもの	
震災復興祈念公園としての特色に関するもの	
3時点の訪問来歴・園内の看板に対する認識・看板の効果	
公園のイメージ・園内での想起体験の有無・災害伝承で大切なもの	
再来園の予定・満足度	
来園者の属性に関するもの	
性別・年齢・居住地・伝承施設への訪問頻度	
災害情報への関心・東日本大震災を覚えているか	

表-3 回答者の属性

性別 (300)			※項目右の○は回答数を示す												
男	女	その他	年齢 (300)												
			10歳以下	11-20歳	21-30歳	31-40歳	41-50歳	51-60歳	61-70歳	71-80歳	81歳以上	答えない			
152	144	4	0	13	28	35	51	73	59	34	3	4			
居住地 (295)															
宮城県内														県外	
石巻	湊・渡波	稲井	新浜・田代	蛇田	河北	雄勝	河南	桃生	北上	牡鹿	市外				
	72	18	3	1	22	4	0	5	0	0	72	96			
震災前に訪れたこと (296)															
訪れたこと			住んでいた		震災から開園までに訪れたこと (297)								伝承施設等への訪問 (300)		
訪れたこと			住んでいた		ない	通った	近くまで	イベントや	日常的に	よく来たりする				この公園	
訪れたこと			通っていた		ない	かかった	きた	市民活動で	通った	訪れている				訪れた	以外なし
125	129	42			117	72	52	33	23	35	159	106			
開園後の来園頻度 (297)															
はじめて	2回目	3-5回	月に一回	週に一回	それ以上	同好会等 (320)									
	177	37	53	10	11	9	ひとり	友人	家族	市民活動	ツアーの	ペット	その他		
							50	45	169	10	11	14	21		
防災情報などへの関心 (300)															
とても	やや	どちらとも	あまり	全く	東日本大震災を覚えているか (300)										
関心あり	関心あり	言えない	関心ない	関心ない	鮮明に	少し	きつかけが	あまり覚え	全く・生ま						
関心あり	関心あり	言えない	関心ない	関心ない	覚えている	覚えている	あれば	覚えていない	覚えていない						
148	134	17	1	0	256	25	13	4	2						

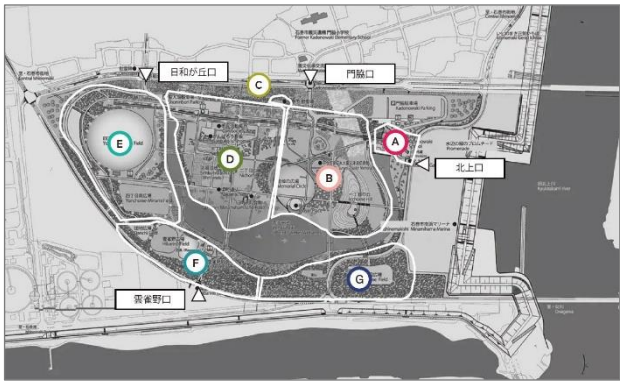


図-3 園内施設図 4)に筆者加筆

表-4 利用状況に関する回答

訪れた場所※(754)								伝承館のみ
A	B	C	D	E	F	G		
107	204	91	142	103	61	41		5

来園目的※(671)							
献花	犠牲者への追悼	展示を見る	津波の恐ろしさを学ぶ	園内を見て回る	特に見たいものがある	市民活動	
11	94	142	91	91	9	8	
イベントに参加	日常的な運動や散歩	自然にふれる	遊ぶ・遊ばせる	親戚や知人の付き添い	通ったついで	その他	
54	49	20	38	13	18	33	

示を見るため」が最も多く、次いで「犠牲者への追悼」が多く回答されており、追悼・伝承施設である「みやぎ東日本大震災津波伝承館」や「祈りの場」があるBと、『『がんばろう！石巻』看板』が設置されているDに多くの人が訪れていた。同時に「イベントに参加するため」や「日常的な運動や散歩のため」といった一般的な都市公園としての利用もされており、EやFに整備された多目的広場に一定数の利用がある様子も確認できる。

3.3. 公園のイメージとその説明要因

(1)ロジスティック回帰分析による検討

どのような要因がイメージに寄与しているのかを把握するために、来園者属性や園内での行動を表す項目を説明変数、公園のイメージに関する項目を目的変数としてロジスティック回帰分析を行った。目的変数には、アンケート項目のうち、「公園をどのような場所だと感じたか」に対する回答の中で、回答数が上位の6つ補[1]及び「公園を回っているとき、以前の出来事をふと思い起こしたり、振り返ったりすることがありましたか」に対する回答を採用した。説明変数はstepwise法による変数選択を行い、表-6に5%及び10%水準で有意な項目を記載した。

(2)イメージの説明要因とそこからの示唆

イメージが「犠牲者への追悼を捧げることができる」では、来園目的が「犠牲者への追悼のため」、「展示を見るため」、「園内を見て回るため」の項目との関連性が有意であった。いずれも来園目的に関するものであり、属性や過去の経験に寄らず目的意識が

表-5 祈念公園のイメージに関する回答

公園をどのような場所だと感じたか※(840)									
犠牲者への祈りを捧げることができる	震災と津波の恐ろしさを実感できる	自分の気持ちを整えられる	防災や減災の大切さを学べる	この場所の歴史を感じられる	かつての街の様子がわかる	多様な人と活動できる	花や植栽が美しい		
165	174	28	126	52	72	4	13		
日常的な散歩や運動ができる	子供を遊ばせることができる	池や緑などの自然が豊か	海や山などの景色が眺められる	辛い記憶を思い出す	よくわからない不思議	その他			
54	48	35	12	25	13	19			

表-6 ロジスティック回帰分析の結果

	犠牲者への追悼	震災と津波の恐ろしさ	防災や減災の大切さ	かつての街の様子	日常的な散歩や運動	子供を遊ばせる	かなり想起があった
AIC	313.5	295.1	297.7	269.1	192.18	157.04	231.34
Hosmer-Lemeshow適合度検定	0.947	0.446	0.079	0.600	0.942	0.087	0.9768
モデルの正答率	74.07%	76.30%	72.59%	77.78%	86.30%	89.26%	83.70%
定数	-1.315	0.610	-0.584	-3.676	-1.951	-1.300	-6.210
性別(男性ダミー)				0.851		-1.174	
年齢						-0.036	
石巻市内在住		-1.292	-2.153		1.190		
伝承施設によく訪れている				-1.924			
防災情報にとても関心がある				0.817			0.943
鮮明に覚えている						1.437	
震災前に訪れたことがある		-0.818	0.706			1.673	
住んでいた・通っていた			-1.895				1.055
開園前に訪れた		0.902				-1.357	0.757
はじめて訪れた	-0.749	-0.766	1.008				
以前から整備を知っていた							
同伴者あり			0.815	0.985	-0.923		1.381
目的物あり							1.319
献花のため							-2.648
犠牲者への追悼	2.388			-0.827			0.753
展示を見るため	0.888	0.686		0.674			-1.546
津波の恐ろしさを学ぶため	1.471	1.343	-0.916				-2.164
園内を見て回るため	1.150		0.662	0.832			
特に見たいものがあったため				1.551			
市民活動のため							
イベントに参加するため					1.446		
運動や散歩のため		-1.259			2.422	-1.147	
自然にふれるため							1.485
遊ぶ・遊ばせるため	-0.903				-2.504	2.741	-2.299
親戚や知人の付き添い							
通りかかったついで							
滞在時間(屋外)				-0.014			
Aを訪れた						-1.073	
Bを訪れた							
Cを訪れた					-1.170		0.750
Dを訪れた				-0.603			
Eを訪れた							
Fを訪れた					1.241	1.017	
Gを訪れた				1.522			
大看板を読んだ	0.559		-0.765	1.306			
中看板を読んだ		-0.592	0.848	-1.174			
小看板を読んだ				0.705			

※5%水準で有意な変数は色付き、10%水準で有意な変数は参考として無色で記載

場所のイメージを形成していることを示唆している。

次に、「震災と津波の恐ろしさを実感できる」、「防災や減災の大切さを学べる」といった、伝承・学習の場としてのイメージは、対象地との近さを表す変数と負の関係にあった。市外からの来園者は、伝承・学習の場というように祈念公園を捉えやすいと考えられる。また、両者の有意な変数の相違に着目する

と、「震災と津波の恐ろしさを実感できる」では、「展示を見るため」が正、「運動や散歩のため」が負であり、「防災や減災の大切さを学べる」では、「園内を見て回るため」と「中看板を読んだ」が正であった。前者を屋内型、後者を屋外型とすると、「震災と津波の恐ろしさ」は、映像やパネル展示を通して、当時の出来事や事実を知ることを感じるものであり、「防災や減災の大切さ」は、震災後から現在に至る経時的な場所の変化や、被災した街の規模感を通して、主体が会得するものであると解釈できる。そのように考えると、災害伝承においては屋内・屋外の体験どちらも大切であり、屋内での展示に適したデジタルデバイスによる情報の提供と、即地的な場所での体験とによる主体内での防災意識の醸成が、同地点で行われることが有効と考えられる。

また、「日常的な運動や散歩ができる」や「子供を遊ばせることができる」といった、日常的な公園としてのイメージは、近くに住む人が実際に、そうした目的をもって利用していく中で形成されるものであり、具体的な利用場所は敷地南側のFである場合が多い。また、「かつての街の様子がわかる」というイメージは、来園目的が「犠牲者への追悼のため」や「津波の恐ろしさを学ぶため」といった明確な目的意識と関わる変数が負であった。正の関連性を持つ説明変数を概観するに、特に目的行為を決めずに園内を散策している中で、過去を伝える地物や、街の様子を伝える小看板などの情報を縁として、過去の街やそれ以前の場所の姿を重層的に体験したと推察される。「ふとした想起がかなりあった」は、防災意識や目的物といった外界への関心、他者の存在、場所記憶の有無が関係していることが示唆された。

4. インタビュー調査からみる想起された心像とその縁の特徴

4.1. インタビュー調査の概要

一連の風景体験において想起される心像を、時間概念を設定して捉えることを目的として、写真投影法を用いたインタビュー調査を実施した。手順としてはまず、被験者にカメラを手渡し、園内を一通り散策する中で「目に留まったもの、印象に残ったもの」をその場で撮影してもらうように依頼した。実験終了後、撮影された写真を基に、「撮影した理由やその時に感じたこと」を契機として自由に一枚一枚の写真について思いを語ってもらい、最後に被験者の属性を把握することを目的として3章で用いたアンケートの一部項目への回答を求めた。表-7に実施要領を表-8にアンケートへの回答状況を示す。

4.2. 風景体験におけるエレメントの構造的特徴

(1)心像の内容分類

撮影された写真を基に語られた内容をカテゴリーに分け、生成的コーディングを行った。結果として表-9に示す12のカテゴリーを得た。

(2)エレメント間の関係の図化

続いてエレメントの特性や被験者の語りの特徴を手掛かりとして図化のルールを構築し、構造を把握することを試みる。具体的には1)エレメント毎に想起された心像に基づいてノードを分類、2)要素間の関係や参照された外部情報を矢印で図化、3)テーマのまとまりを把握する、という手続きを踏む。

(3)エレメントの構造的特徴と主体の関係

図-4に作成した構造図の例を示す。要素間の連関や傾向に着目し、これらを1)ノードの色で表される想起傾向、2)リンクで表される連関の様相、3)意味的な繋がりや表されるストーリーの様子、という観点から分析し、4つの類型を得た。

表-7 インタビュー調査実施要領

対象者	石巻市在住及び所縁のある協力者
実験方法	写真投影法実験及びインタビュー
実施人数	11名
実施日	2021年10月25日-10月31日
所要時間	一人当たり約1時間半

表-8 被験者のアンケート回答状況

被験者	年齢	性別	震災前	開園前	開園後	伝承施設等	防災情報	東日本大震災	同伴者
1	30	男	なし	イベント	月1	いくつか	とても	鮮明に	○
2	30	女	訪れた	近くまで	3~5	いくつか	やや	少し	○
11	40	男	住・通	日常的に	初めて	いくつか	やや	鮮明に	
6	20	女	訪れた	通った	初めて	いくつか	どちらとも	鮮明に	
8	20	女	訪れた	近くまで	初めて	いくつか	とても	鮮明に	●
9	30	男	訪れた	日常的に	月1	いくつか	やや	鮮明に	
4	20	男	住・通	日常的に	3~5	いくつか	とても	鮮明に	
7	30	男	訪れた	イベント	初めて	いくつか	とても	鮮明に	●
3	40	女	訪れた	通った	2	よく	とても	鮮明に	
5	20	女	住・通	なし	2	いくつか	やや	鮮明に	
10	40	女	訪れた	イベント	初めて	いくつか	とても	鮮明に	

※○と●はそれぞれベアを表す。また二重線はエレメントの構造的特徴に基づく被験者類型を表す

表-9 心像の内容分類

A	他者の存在	そこにはいない人を想像したり 生き物や他人に感情移入、共感をしている
B	海が存在	見える・見えないに関わらず、 海・水が存在や気配をイメージしている
C	変わらないもの	物理的に変化がないもの、意味や機能が継続しているもの 時間の流れなどをイメージしている
D	震災時の様子	3.11の時のことを想起している場合や 将来の震災時の状況をイメージしている
E	かつての街とくらし	かつてその場所にあった具体的な風景やコトを想起している
F	未来の展望	現在の状態から、将来空間がどのように 変容しているかをイメージしている
G	仮想行動	「わたし」もしくは他者が、何かしらの行為を している様子がありありとイメージしている
H	対比	過去と現在の対比、 「震災と復興」のような対立概念を含むイメージ
I	思い入れ	懐かしさや、自分と関わりが深いものに対して 個人的記憶を想起している
J	強い感情の動き	個人的出来事、過去経験と強いつながりがあるものが想起されている ポジティブかネガティブは問わない
K	明確な意思	風景や眺めを自らの意思に基づいて選択していることが 申告された。もしくは明確である場合
N	その他	撮影対象の説明や、発見した事実の説明にとどまっているもの 「なんとなく」という撮影理由しか抽出されなかったもの

a) 環境応答型

被験者 1, 2, 11 が含まれる。構造図は特に無色のノードが多く、連関も希薄である点が特徴である。被験者 1 では、聖人堀を通して繰り返し「かつての街とくらし」を想起している点に特徴があり、震災前の南浜・門脇地区への訪問歴はないことから、エレメントの物性的特徴からの想起であったと推察される。また、目につきやすい図的エレメントに繰り返し注目し、手がかりとしている点に特徴がある。

b) 重連関テーマ独立型

被験者 6, 8, 9 が含まれる。複数の重連関と一テーマの心像の想起がみられるが、全体に通底するテーマのようなものはなく、個人に関連のある特定のエレメントとその周囲の地物間で心像の想起が完結している点に特徴がある。被験者 8 は、一丁目の丘を登りきる手前で僅かに見えた海を見て「正直もう水平線見れないと思ってたんですよ、見れないと思ってたんですけど、ここの丁度上がる手前で見えたので、あ、見えたって思って撮りました」と情景としての海を、また旧門脇小学校を見て、避難時の様子と共に思い出を語るが、これら、海を通しての心像と、震災遺構を巡る過去経験の想起は一貫したテーマの中での連関は見られなかったことから、個別のエレメントに対する心像の広がり活発であったと解釈できる。

c) 重連関テーマ集約型

被験者 4, 7 が含まれる。あるエレメントを結節点としてテーマ同士が関連しあっており、それら心像を包括するような風景が最終的に主体によって発見されている点で共通点が見られた。被験者 4 では、祖母の住む復興公営住宅や自身の語り部活動の拠点として利用していた南浜つなぐ館、植樹に参加した松などが語られており、今後の繋がりや活用という

一つのテーマのまとまりを形成している。その後、家があった地点や聖人堀を通して、以前の思い出が回想される。こうした震災前の記憶というまとまりと前者のテーマが、伝承館、MEET 門脇、旧門脇小学校が映り込む構図の中で集約され、「やっぱりそれが近い位置で全てまとまっているっていうのが、いいのかなとは思いますね」と語られた。

d) 多重連関型

被験者 3, 5, 10 が含まれる。エレメントが重層的に繋がりを有しており、いくつかのテーマのまとまりが、織り込まれるように展開している点に特徴がみられる。また、3 名が共通して人、海、水、といった抽象度の高いモチーフを通してエレメント同士に関連を持たせている。被験者 10 では 1)津波による被害の様相, 2)それでも再生する自然, 3)水から連想される津波と今も寄り添う気持ちのある他者、というテーマの大きなまとまりが確認できる。これらを踏まえた上で丘からの眺めでは、「これは本当公園がこんなに立派にすごいできてきてっていう、まあ一望できるところだったので、一望できるような所を撮りました。水もあって、芝生もあってっていう、と、遠くには昔の石巻の、昔からの石巻の風景があるっていう景色だったので撮りました」というように、出来事が遠景、中景、前景の中に通時的に見出され、印象的に感じられている。

4.3. 想起されるイメージの縁の特徴

以上の構造図ごとの特徴を、主体と環境の間柄⁵⁾という観点から図-5のように整理し、想起されたイメージについて理解するとすれば、環境応答型は認知が優勢であり、図としてのエレメントを通してイメージが想起されやすいと言えるだろう。ただし、その際には過去の経験が、知覚した対象に連想され

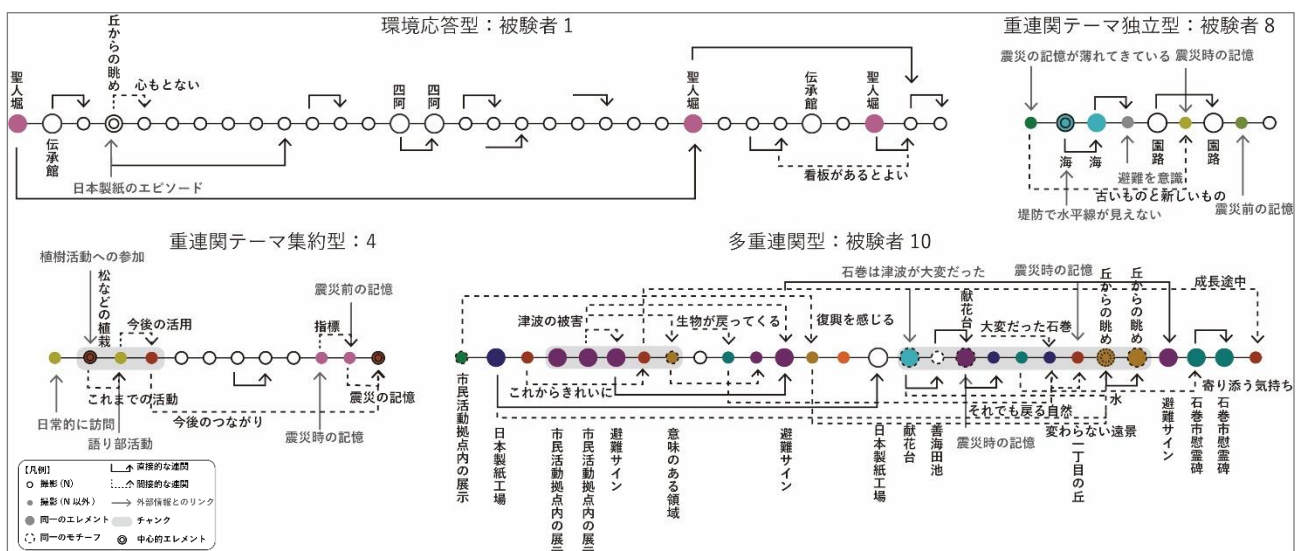


図-4 エレメント構造図の一例

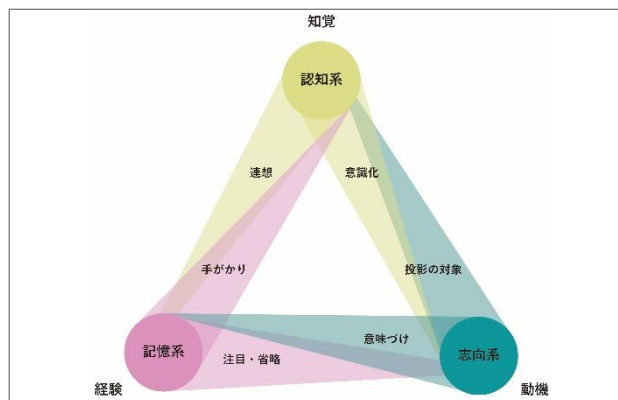


図-5 間柄生成のフレームワーク

るイメージを重ねる、志向性が環境の中の何に意識を向けるかを規定していると考え、同様に、重連関テーマ独立型は記憶系と認知系の間、重連関テーマ集約型は記憶系と志向系の間、多重連関型は志向系が優勢、というように解釈することができ、外部から観察可能な類型ごとのエレメント間の構造的特徴は、「イメージの縁の関係の型」の相違に由来する、と解釈できるのではないだろうか。

5. 結論

5.1. 本研究の成果

まず、石巻南浜津波復興祈念公園では、三層のレイヤー構造という地区の通時的な場所性を表象するコンセプトが導かれ、具体のデザインへ昇華されてきた(2章)。こうした祈念公園において個人が想起する具体の心像は様々であるが、エレメントの連関に着目した構造図の分析からは、主体と環境の関係に依存すると考えられるいくつかのパターンが示唆され、それらを間柄生成のフレームワークの中で整理した。本研究においては4類型が観察された(4章)。

また、心像の全体像としての祈念公園のイメージには、主体側の目的意識が特に影響しており、居住地や年齢などの、外部から観察可能な主体の属性に依存するものではない。そのうえで、一般的に広く感じることで「追悼のための場」としてのイメージ、主に市外からの来園者が感じやすく、屋内での事実の提供と屋外での主体による体験が相互に役割を補完しあうことで醸成される「学習のための場」としてのイメージ、市内の利用者が日常的に祈念公園を利用する中で醸成される「日常利用のための公園」としてのイメージ、具体的な地物や情報の提供によって屋外を散策している中でふと感じやすい「かつての街を伝える場」としてのイメージがあることが明らかとなった。また、主体の「ふとした想起」には、高い防災意識、他者の存在、場所記憶の有無が関係している可能性が示唆された(3章)。

5.2. 考察と今後の課題

震災から10年を経て、震災復興祈念公園へのまなざしは益々多元化している。それは外部から観察可能な基本属性に押し込められるものでも、ある視点からの眺めに規定されるものでもない。そうした極めて個人的な具体のイメージが想起されながらも、それは属性や世代を超えて、あの時東北で、あるいはメディアの中で3.11を経験した隣の誰かと共有可能な、場所へのイメージが下支えしている^{補[2]}。ベルクは「風景とは、最終的には、人間の世界に対する関係の、感覚で捉えられる表現のことである」と述べている⁷⁾。では、文字通り風景が消失し、コンテクストが一旦瓦解した環境において、風景はどのように再生されるのか。例えば、個人にとってさえ安定しないイメージの数多が他者と共有され、その動的総体としての全体のイメージをその時々主体が編纂し、意味づけが続けられる^{補[3]}といったことは、「歴史的記憶¹⁾」へのカウンターとなりえるかもしれない。こうしたイメージの様相は土木デザインの形態によっても異なるのだろうか。今後も復興デザインとその風景について模索したい。

補注

- [1] 有効回答270件の内の上位6つを用いた。
- [2] 内藤廣は、空間の価値を、分断された溝を深いところで「和解」させることにであると述べている⁶⁾。
- [3] P・ノラは「記憶の場」という概念を用いて、過去の出来事が「記憶の意思」をもって場に記銘され、再構成され続けることで「社会的共同体のメモリアルな遺産を象徴する要素」になるとし、記憶が場を通じて、時空間を超えて想起されることを示している⁸⁾。

〈参考文献〉

- 1) 吉原直樹：震災復興の地域社会学 大熊町の一〇年、白水社、2021。
- 2) 矢ヶ崎大洋、一ノ瀬友博：オーラルヒストリーの収集と分析による東日本大震災以前の記憶と地域イメージ-宮城県気仙沼市唐桑町舞根地区の事例-、農村計画学会誌 32, pp.1209-1214, 2013。
- 3) 槻橋修、山田恭平、中村秋香、平尾盛史：被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第79巻、第669号、pp.1129-1137, 2014。
- 4) 石巻南浜津波復興祈念公園、公園管理事務所：石巻南浜津波復興祈念公園、<https://ishinomakiminamihama-park.jp/ja/usageguide/> (入手 2021.8.1)。
- 5) 中村良夫：風土自治-内発的まちづくりとは何か、藤原書店、pp.240, 2021。
- 6) 内藤廣：建築の難問-新しい凡庸さのために、みすず書房、2021。
- 7) オギュスタン・ベルク：日本の風景・西欧の景観-そして造景の時代、講談社現代新書、1990。
- 8) ピエール・ノラ 編、谷川稔 監訳：記憶の場-フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立、岩波書店、2002。